

一本の古い根と見えたもの／奇妙な形にねじれて山腹から生え出たあれば、／突にあの惑わされた仲間のひとりだった、／またいちめん白く垂れていると見えた／草は、彼の薄い色褪せた髪にすぎなかった、／また彼がむなしくも隠そうとした穴は、／眼であり眼であったものだ、—（もしおまえにできるなら、／堪えてこの舞踏に加わるな、わたしも加わらねばよかったのだ！）／と不気味な顔が言った（わたしの思惑を察知して）。

けだし英語のテルツァ・リーマの典型であるに違いない。この部分の1行目～7行目は、『詩の効用と批評の効用』でも引用されて、〈それ以前の長篇詩よりもうまく書けているだけでなく、知恵も増している〉と述べながらも、〈シェリーの詩篇の中の観念を無視してその詩だけを享受できようか〉と否定的判断を付け加えることを忘れなかった。それに対してこんどは、〈ダンテの詩的想像力に生れつき近いものを持ち、ダンテの詩に浸っていたので……彼の精神は、最も偉大な撮もダンテ的な英語の詩篇を書こうとふるい立った〉、〈これだけうまくはわたしに書けない。わたしはダンテに対する英語の最高の讃辭のひとつとして引用するのである。それは、ひとりの偉大なイギリス詩人のスタイルと魂との両方に対して、ダンテが与えた影響を証明してくれるからである〉と絶讃するに到る。このようなエリオットのシェリー評価の変化は、ミルトン評価のそれと規を一にするもので、逆の評価の変化はダンテについて見られる。これは、1927年のイギリスへの帰化、およびユニテリアンから国教会への回心という実人生上の転機を何ほどかの契機としながら、その後の詩作体験を含むさまざまな経験の累積的な、つまり深化と拡大の結果であったろうと考える以外にない。（12月25日受理）  
茨城大学教授

## 「雲雀」の レジェンド／石原武

ここに不思議な詩を紹介しよう。アメリカの薄倅なモダニスト、ケネス・パッチェンの第三詩集『獅子の齒』から的一篇である。

ケネス・パッチェンを、20世紀のシェリーだと呼んだ批評家（CIグリックバーグ）がいた。かれによると、パッチェンが、シェリーと違うのは、「この時代の感じ易い少年が、急進的な政治状況にあって、深刻な変化を経験した」ということだという。事実、かれの詩は出発から〈怒り〉にみちていた。ヘンリー・ミラーは書いて、「ニューヨークで初めて会ったとき、こいつは〈抗議〉の生きた見本みたいな男だな。まるで誠実すぎる暗殺者だ……手を握ったとき、おれはそう思ったな。こ奴、自分の手でこの世の暴君やサディストを一人残らず殺すつもりだな。おれたちの真中で爆発しそうにせわしい息を吐いている人間爆弾だ。それでいて優しいんだな。あの鼻息の荒いドラゴンの中味は気の優しい王子さんだぜ……優しい魂ってのは、過敏な肌を守るつもりで、火のマントをかぶりたがる。」（*Kenneth Patchen - a collection of essays* by Richard Morgan. AMS 1976）

亡霊たちが怒りの天幕を不潔にする

「ほくらにとってそれが生活だ」

そういえば、シェリーも〈怒って生まれてきた〉詩人であった。アンドレ・モロワが

Aerialで描く若きシェリーの肖像も、いつも〈火のマント〉をかぶっている。イートン・スクールで上級生のしごきに少女のような白い肌を紅潮させ、亜麻色の髪をなびかせて走るかれの風貌、オックスフォードを『無神論の必然性』の出版頒布によって放校される時の、あの〈怒れる沈黙〉、それらはヘンリー・ミラーが描くパッチェンの肖像の原像のようにさえ思えるほどだ。

1816年、シェリーは妻ハリエットらを従え、革命家を夢見て、ダブリンに赴き、アイルランドの独立運動に加担しようとする。勿論、かれの夢は挫折する。パッチェンの詩の出発も革命への情熱であった。しかし、グリックバグの指摘のように、「かれはマルキシストの軌道の内部にとどまっているのには、その精神がもともと創造的すぎた。」第三詩集『獅子の歯』あたりから、かれの詩は天使や創世記的なレジェンドの比喩にいろいろられていく。

シェリーとパッチェン、この突飛な類似は読者にあまり意味がないかもしれない。あるとすれば、両者の決定的な違いだろう。シェリーは革命の挫折を経て、短かい生涯に溢れるほどの壮大にして繊細な詩篇をうたい上げ、英文学史上もっともすぐれたヴィジョンナリーズの一人になった。パッチェンはやがて革命の軌道から、Anti-literatureの方位へ、怒りの言葉と想像力を投げ出していく。殺しの夢にうなされる〈はぐれ天使〉そのままに。

シェリーの「西風へのオード」の〈雲雀〉のヴィジョン、そのunpremeditated artの豊かな調べに対して、パッチェンは次のような反詩的な〈雲雀のレジェンド〉をもちだすのである。

#### 雲雀たちのための理由

巨人が子どもらの木に着いたのは  
もう夜明けが近かった  
子どもらの顔は冷たく暗い枝に

白い林檎のように輝いていた  
服も小さな外套も  
風を孕んで脹らんでいた  
巨人は笑いも泣きも  
重い足で踏みつけもしなかった  
かれはすぐに仕事にかかった  
子どもらをつまみ上げて  
肩に金色の紐で吊した藁の籠に  
優しく入れてやった  
ところが一人だけ落としてしまった——  
水でうめた牛乳のような髪をした可愛い女  
の子だった  
その子は長い草の中に落ちた  
巨人は指から血が出るほど探し廻ったが  
その子を見つけることはできなかった  
そうして白々と夜が明けた

かれは拳を天に振って  
神に悪態をついた

でも答えはなかった  
巨人は木の前に膝をついて  
幹を両手に把んで  
揺すった  
木の子どもたちはみんな草の中に落ちた  
巨人はのしのしと子どもらを  
ゼリーのように踏み潰した  
それでもかれの気は治まらなかった  
かれは半ば子どもで埋っている籠をとると  
火をつけて  
みんな焼けてしまうまで  
籠の把手をつかんでいた  
すると世界の方角から  
湯気を立てた馬に乗って  
二人の男が近づいてきたのだ  
かれはポケットから小さな銀の笛をとり  
二人がかれの所にくるまであとからあとか  
ら  
調べを奏でた

本学教授